

【日・生きる者】

創世記 1 章 24 節「神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」そのようになった。」

創世記 2 章 19 節「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり・・・」

創世記 2 章 7 節「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり・・・」

聖書は動物も人間も土から造られたと書かれてあります。この点は共通しています。しかし、人間の創造において動物と決定的に違うことがあります。それは人間は神様に似せて造られたという点です。

創世記 1 章 26 節「神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

また、創造の過程において、動物の創造ではただ地に命じられただけでありますが、人間に対しては自らの手で形作り、さらに「その鼻に命の息を吹き入れられて生きる者となりました」(創世記 2:7)。息とは霊とも訳せる言葉で、人間は神様の息、神様の霊が吹き入れられて生きる者となったのです。この生きる者とは、英語の欽定訳では「生きる塊」と訳されていますが、ここからわかることは、肉体と魂が独立してこの世界に存在することはないということです。人間が死ねば、肉体は土に返り、魂だけが何か別の意識体として、肉体を離れた状態で、この世に存在し続けることはありません。別の表現をすれば、人は死ねば、いかなる形であれ、「生きる者」ではなくなるということです。

【月・罪を犯した魂は必ず死ぬ】

エゼキエル書 18 章 4 節「すべての命はわたしのものである。父の命も子の命も、同様にわたしのものである。罪を犯した者、その人が死ぬ。」

人間にはなぜ死ぬことが定まっているのか。それは罪の結果であると聖書は教えます。死は人間だけでなく、動物にも、植物にも、すべて命あるものに入り込んできました。もし人間が罪を犯さなければ、死もありませんでした。ところで、通常死といえ、この肉体の終わりのことを言いますが、聖書は同時に、「生きる者」「生ける魂」としての死があることを教えています。マタイ 10:28 で、イエス様は「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」と、肉体と魂の滅び、死があることを教えています。考えてみますと、クリスチャンはイエス様を信じて罪赦されて、死から命へと移されたはずですが、この肉体の死は等しくやってきます。ということは、魂の領域で起こる出来事であることがわかります。魂という概念はあります。魂の死というのもわかりにくいのですが、天国に救われなかったものたちのことであり、第二の死とも呼ばれています。

ヨハネの黙示録 20 章 6~8 節「第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する・・・地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとして出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。その数は海の砂のように多い。」

神様を信じて死から命へと移されるとは、この第二の死からの解放なのです。

【火・霊は与え主である神に帰る】

人間が死ねば肉体は土に返り、魂も独立して存在することが出来ないことは分かりましたが、肉体に吹き込まれた神の息、神の霊はどうなるのでしょうか。コヘレトの言葉 12 章 7 節に次のような言葉があります。

「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」

ここに霊は与え主である神様のもとに帰るとあります。これは人は死んだあと肉体は土にかえり、霊は与え主である神様のもとでいつまでも残っているということでしょうか。しかし、そうなると悪人の霊も神様のもとに帰っていくことになり、どうもすっきりしません。このコヘレトの言葉 12:7 のみ言葉は、人間が死ぬことを、人間が創造されたときの逆の過程を表現しているに過ぎません。神様が吹き込まれた息(霊)は、単なる土の塊りに過ぎなかった体を生きる者に変える力でしたが、逆に

この生きる者に変える力が取り去られれば、人は死んで、何も無くなるということを教えているわけです。

【水・死者はもう何一つ知らない】

ヨブ記 3 章 11～13 節「なぜ、わたしは母の胎にいるうちに死んでしまわなかったのか。せめて、生まれてすぐに息絶えなかったのか。なぜ、膝があつてわたしを抱き、乳房があつて乳を飲ませたのか。それさえなければ、今は黙して伏し、憩いを得て眠りについていたのであろうに」と、ヨブは辛い苦しみを吐露していますが、ここに死ぬことを眠ると表現していることがわかります。それは憩いであり、この世の苦しみとは縁のない状態です。また希望に満ちた新しい復活の朝があることを予感させてくれます。

詩編 115 編 17 節「主を賛美するのは死者ではない。沈黙の国へ去った人々ではない」と、死者は主を賛美することがない、復活するまで何も分からず沈黙していると書かれてあります。また、詩篇 146:4 では、「霊が人間を去れば、人間は自分の属する土に帰り、その日、彼の思いも滅びる」と、もはや考えることをしなくなると言っています。

さらに、コヘレトの言葉 9:5 では、「生きているものは、少なくとも知っている。自分はやがて死ぬ、ということ。しかし、死者はもう何ひとつ知らない。彼らはもう報いを受けることもなく、彼らの名は忘れられる」とか、コヘレト 9:10 では「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。いつかは行かなければならないあの陰府には仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」と言っています。

要するに、聖書は死の状態について眠っているような状態となり、この世のこととは何の関わりもなくなると教えているのです。先祖がいつも見ているとか、霊魂がさ迷っていると言うような考えは、聖書的ではありません。

【木・先祖たちと共に眠りにつく】

創世記 25 章 8 節「アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。」

列王記下 24 章 6 節「ヨヤキムは先祖と共に眠りにつき、その子ヨヤキンが代わって王となった。」

旧約聖書では、しばしば死者が先祖の列に加えられたとか、先祖と共に眠りについたというような表現をしています。このような表現は、個人主義がはびこる現代社会では、あまりピンと来ないかもしれませんが、少なくとも死ぬのは自分一人ではない、自分が最初の人でもない、死はこれまで何十年、何百年と続いてきたことなのです。無意識であっても先祖たちと共に復活の朝を待つのだという思いにさせられます。